

身体知研究の粗描と課題

身体のコミュニケーションと身体技法を中心に

西原 康行

Abstract

This study review the previous studies of embodied knowledge according to focus on the communication and a technique of body.

The education through the body have been abundantly done in the physical education. But until now, a number of studies on the physical education have been done by the domain of physiology, biomechanics, medical science and value of sport. Then, there is hardly research of a physical sense or embodied knowledge in the field of physical education. Therefore, we extend a field over the embodied knowledge, and at first this study review the prior studies of embodied knowledge according to focus on the communication and a technique of body.

As a result, the study in the communication of body began with which was innate or acquired ability. After that, the study shift to the point of the sign. Recently, practical mutual relationship of body, which is done by using the methodology of the field work, is the core of the study. On the other hand, the study in a technique of body began with the relation of the tool to body. After that, the study shift to the behavior or habit of the daily life.

キーワード……身体論 コミュニケーション 身体技法 感覚教育

1. はじめに

現代社会を生きる子どもたちに今、何が起きているのか。希薄な人と人との関係性や、身体感覚を越境した過剰なモノや情報との接触、無機質化した都市の景観といった空間を生きる子どもたちの生活世界は、彼らの親や祖父母の世代が生きた世界とは明らかに違う。彼らの親や祖父母が生きた世界を、門脇は「自然の恵みの中で自分の身体を通して現実の世界を認識していくことができた時代」(門脇 1992:10)と表現して、一方、現代社会を生きる子どもたちの生活世界を<異界>と表現し、その相違と同調性を明らかにしている。この<異界>の典型は、現代の子どもたちに遊びといじめの境界がなかったり、仲間との勝負のなかで勝つことの達成感や負けることの悔しさを味わえないランクレスプレイの世界を生きていることからうかがえ

る。例えば、昨今のTVゲームやパソコンによるバーチャルなゲームの世界では、本物の人間の関係性で成り立つ身体感覚は達成されない。現実世界の「遊び」の領域では、社会の約束事や対戦者同士の約束事の基に、互いの身体を傷つけないという大前提のルールで勝敗を「楽しむ」。そして、その中で現実の身体感覚が芽生え、「からだで憶える規範や原理」(鷺田 2000:3)によって他者への畏敬の念が醸成されていくのである。昨今の年少者による残虐な事件の多発は、このような<異界>を生きる子どもたちの生活世界が深く関わっていることが想像される。

一方、このような現代社会という<異界>を生きる子どもたちと「教育」を介し、最も多くの時間を共有し、接点を多く持つ学校教育については、上述の子どもたちの様々な問題を学校における教育力の低下と、教員の資質の問題と同じコード上で語られることにより、「学校における教育力の問題」というコードが増幅された形で現代社会の問題として投げかけられている。苅谷は「子どもの事件が起こると必ずといってよいほどその責任や原因の一端を学校に求める声があがる、子どもの事件を学校の問題と結びつけて語る傾向が根強い」(苅谷 1998:74)と指摘し、その原因が、大衆社会とともに発展してきた日本の教育の歴史的コンテクストにあることをうかがわせる言説を述べている。日本の教育が歩んできた歴史的なコンテクストの上に現在の教育が存在する限り、学校における教育の力を再考することから、子どもたちの問題をとらえることが必要だと考える。また、特に現代社会における子どもたちに起こっている現象学的な視点からの問題として身体を取り上げざるを得ないことは、上述の社会的な背景から明らかである。そして、学校教育における身体を介した教育は、「体育」(=身体教育)において最も多く担われており、社会における身体教育の必要性とその再考が叫ばれている。身体教育についての研究は、これまで運動生理学、運動学、心理学あるいは文化としてのスポーツ享受能力を中心に進められ、この視座からの研究はかなりの成果を上げている。しかしながら、身体感覚を醸成するための深い熟考には至っていない。さらに、その視点は、対象としての子ども、教師と子どもの関係性に向けられ、教師そのもののあり方から身体教育をとらえたものではない。佐藤学は教師の仕事を「再帰性」「不確実性」「無境界性」の三点とし、特に「再帰性」は、子どもに教えたことが自らの教師に帰ってくるということから、教師そのもののあり方に目を向けることが、子どもとのかかわりの中で無視できない重要な視点となるとしている(佐藤 1994:32 - 36)。そして、この三つの特徴は、アメリカにおける教師文化と相対的に語られる日本の教師の「徒弟制」に拠るところが大きい(平井 2003:142 - 143)。苅谷は、この徒弟制を「日本の学校のエスノペダゴギーは、問題をはらみながらも、反省されることなく再生産されている」としている(苅谷 2000:5)。しかしながら、この徒弟制から生まれた「再帰性」は、必ずしもネガティブに語られているだけでなく、教師が「反省的(Reflexive)」に自らの実践を省察し、専門的成長を促すという機会を与える。この成長を促す「反省的实践」は、Donald A. Schonによる「Educating the Reflective Practitioner」(Schon 1987)で明らかにされている。日本国内では、生田孝至により、認知的な側面から力量形成を明らかにしていく「オンゴーイング」(生田

1998:113) という実践的な研究が積極的に行なわれ、実践が積み重ねられている。

本研究は、以上のような現代社会における問題から、当該職業としての職業的アイデンティティと深く結びついた身体教育の教育実践者特有の行動様式や知識のあり方と結びついた実践の知を明らかにするが、その前提として、身体論に関するこれまでの研究を粗描しておく必要がある。さらにその視点は、先の運動生理学、運動学、心理学、あるいはスポーツ文化の享受能力といった実証主義的な視点ではなく、暗黙的な認知について明らかにすることから、身体を現象学的にあつかった研究を粗描することにより、本研究のめざす身体教育の教師の実践の知の手がかりを得ることを目的とする。

2. 身体のコミュニケーション研究

身体は社会関係を形成するための実質的な表層としての基盤であるだけでなく、身体のコミュニケーションを通して社会における制度や規範のようなものも形成していく。つまり、身体のコミュニケーションが、身体を規定し、その規定された身体が社会を形成し、また自らの身体に還元されていくという再生産を繰り返していると考えられる。これは、先の門脇における、希薄な人と人との関係性や、身体感覚を越境した過剰なモノや情報との接触、無機質化した都市の景観といった空間を生きる身体との違いに符合する。

本章では、身体のコミュニケーションに関する研究を「生得性と文化決定論の視点」「記号論的視点」「文化人類学的な視点」「対面相互行為としてとらえた研究」、そして「コミュニケーションとしての身体の重層性の視点」にカテゴライズして粗描する。

(1) 生得性と文化決定論の視点からの研究

ヒトの非言語的行動が生得的なものなのか、あるいは学習によって獲得されるものなのかについての認識に立った研究は、チャールズ・ダーウィンに始まるとされている(Scherer & Ekman 1982:3)。ダーウィンは、系統発生の連続性を仮定して生得性を重視したが、特に行動の精密な観察に基づき、ヒトと他の動物種の広範な比較や顔面表情の文化的な比較を行っている。この手法は、その後の人間行動学や文化人類学に継承されたが、特に文化人類学的な手法によって、ダーウィンの生得性を批判し、身ぶりが文化的に規定されると同時に社会環境の影響を受けて変遷するものであることを明らかにしたのは、デイビッド・エフロンである(Scherer & Ekman 1982:4-5)。エフロンは、ニューヨークに住む東洋ユダヤ系移民と南イタリア系移民とを比較して、身ぶりの様相が二つの文化集団の間ではっきりと異なることを見出した。もっとも顕著な違いとしてイタリア系移民がものの形をイメージした図形的なジェスチャーを多く使うのに対し、ユダヤ系移民は思考の道筋を描くジェスチャーを多用することがあげられる。さらに、イタリア系は「標識」や即興的なパントマイムのようなジェスチャーを頻繁に行うが、ユダヤ系には観られないことを明らかにしている。

さらに、レイ・バードウィステルは先のエフロン文化決定論を受け継いで「身体運動学」を構想した(Birdwhistell 1970:11)。バードウィステルは、人間の身体運動は言語と類似した階層的な分節構造をもっていると考え、その最小単位は音素になって運動素としてとらえ、複数の運動素が結合して運動形態素をつくり、さらに運動形態素が複合して運動形態の構成体として現出するとしている。このような階層的な組織化は厳密なコードに従っており、慣習と後天的な社会的基盤の上に成り立つ学習によって、ある文化共同体の成員に共有されるとしている。たとえば、唇の両端の持ち上げりを「喜び」の感情として認識する社会もあれば、まったく意味のない表情ととらえる社会もあるとして、先の生得性を批判的にとらえている。

これに対し、より鮮明に生得的（＝遺伝的）な決定論の立場にたつのは、アイベル・アイベスフェストの人間行動の比較行動学的な視点による研究である(アイベスフェスト 1979:546)。アイベスフェストは、先天性盲聾児の表情の分析から、顔面による表情表出は系統発生によってヒトに組み込まれた遺伝的プログラムに支配されているとしている。世界各地の民族集団の多様な非言語行動を撮影・分析し、友好的な出会いや挨拶に際して見られる「眉上げ」と「目の開き」、様々な拒否の身ぶり、幼児の攻撃的な行動要素などが遺伝的にプログラムされていると論じているのである。しかしながら、莫大なデータの共通点を見出しながらも、どのような人間認識がもたらされるのかについての論考がないことも明らかである。

このように、生得的な普遍性と文化決定論の視点からの研究は、ダーウィンを源流としながら進化論的なアプローチと、その対極にある文化決定論に根ざしているが、いずれも、相互行為としての視点が欠けているといえる。また、マイルス・ペイタソン (Patterson 1983:5 - 6) も同様に、相互行為としての視点を外した発信者側からの理論だけに留まらず、「慣習行動に意味を与えることのできる知覚」として身体のコミュニケーションを慣習行動の視点から相互関係的に述べている。

生得性と文化決定論の認識に立った粗描は以上であるが、言語的メッセージと非言語行動は、たえず絡み合いながらコミュニケーションが行われていることを考えれば、言語的メッセージと非言語行動との関係性の視点を考慮に入れる必要がある。次節では、言語と同一の記号論的な視点に立った研究および文脈としてのコミュニケーションについての研究を粗描する。

（２）記号論的視点の研究

前節のバードウィステルは、言語と類似した階層的な文節構造を非言語的な行動が持つとして分析しているが、さらに微細な分類を行なっているのが、エクマン (Ekman 1979:16) である。エクマンは、「身ぶり」を5つに分類している。第一は、ある文化共同体の中ではっきりとした意味を持ち、言葉の代わりに使われる「標識」である。例えば、認めたり肯定的にとらえる「Yes」は首を縦に振り、否定する「No」については、首を横に振るといった身ぶりを指す。第二は、発話に随伴して起こり、その意味内容を補強したり拍子を取ったりする「例示子」である。例えば、発話に対してうなずくであるとか、手のひらを自らの身体から相手に返すとい

った身ぶりである。第三は、身体の状態を調整したり、それを社会的・物理的な環境に適応させる働きを持った「適応子」である。子どもの目線まで身体をかがめて話すであるとか、握手をしながら話すといった身ぶりである。第四は、出会いを方向づけたり、会話の流れを調節したりする「調整子」であるが、このカテゴリーは、他のカテゴリーと文節し難い曖昧さを持っている。挨拶の動作であるとか、視線や姿勢の変化（他の会話に入る際、足を組みかえるなど）である。第五は、感情表出に役立つ「情緒表示」であり、顔面筋の動きによって作られる「表情」がこれにあたる¹⁾。キイ（Key 1975:29-31）は、運動的行為を、語彙的、記述的、強化的、装飾的、偶然的の五種に分類しているが、語彙的と記述的、強化的と装飾的のカテゴリーの曖昧さを拭うことが難しいとともに、身体のコミュニケーションをこの5つに収束させることですべてを説明できないと考える。一方、ペイタソン（Patterson 1983:5-6）は、12項目の分類を掲げている。身体の姿勢、向き、身体間の距離、身体接触、視覚行動（発話者がオーディエンスに目を向けているか否か）、顔の表情、発話の長さ、身体による発話のさえぎり、身体の傾き、関係づけの身ぶり、うなずきである。

以上、最も単純な記号論的な視点に立脚した共有コードのモデルを粗描した。しかしながら、コミュニケーションを成立させるための必要条件は、社会的に共有された記号体系として、その記号体系を使ってメッセージを発信する人と、同一記号体系を使用して解釈する受信する人の関係性が必要となる。上記のモデルにしたがうとするならば、発信者の「身ぶり」からどの受信者も同じ記号を解釈することができることになる。ところが、先の文化決定論にしたがえば、違う文化圏間では発信者の首を縦に振る「身ぶり」を違った記号体系として受信するかもしれないし、親しい間柄であれば個体特異的な行動から正確な伝達や推測が可能となるかもしれない。北村は、「コミュニケーションとは、『話が通じる』という一貫した方向性のもとに調整された相互行為である」（北村 1989:269）と述べ、「身体的な交流という現象を正当に評価しようようなものへと、コミュニケーションの定義を転換」（北村 1987:41）することを問題意識の根幹にしているが、言語的コミュニケーションを記号化したコミュニケーションとして収束させることに批判的なスペルベルとウィルソン（Sperber & Wilson 1986:55-64）が指摘しているように、身体のコミュニケーションも記号論で説明していこうとした場合、出口の見えない袋小路に入っていくと考える。特に、身体には、先の文化決定論的な記号体系を共有コードとしてみなさない視点のほか、本研究が最も注目する、親しい間柄における、あるいは身体の研ぎ澄まされた人同士における個体特異的なコミュニケーションの存在を仮説として掲げるからである。

（3）文化人類学的な視点

先の生得的な普遍性と文化決定論の視点からの研究におけるディビッド・エフロンは、ニューヨークに住む東洋ユダヤ系移民と南イタリア系移民とを比較して、身ぶりの様相が二つの文化集団の間ではっきりと異なることを見出したが、デズモンド・モリス（モリス 1981:136）は、

身ぶりの形態や意味が、地域・文化ごとにどのように違うかをより広範な分布としてとらえている。先の記号論におけるエクマンの「標識」に相当する身ぶりの違いを、ヨーロッパ大陸から均等に選んだ40ヶ所の地域で調べ、20種の異なる形態をもった「標識」の分布を調査している。それによると、北欧から南欧まで共通した「標識」は1~2種類しかなく、同じ形態の「標識」が他の多くの地域で見られるが、それに付与される意味が著しく違う場合が多いことを明らかにしている。しかも、南欧のほうが北欧よりその数が多く、ラテン系の人々のほうが身ぶりが大げさだということや、特定の言語との連関性が認められず、共通の文化史との関連で身ぶりが分布しているとしている。例えば、ナポリの南50キロでイタリア半島を南北に分けると、北側では「No」を表現するのに頭を左右に振るのに対し、南側では頭を後ろにのけぞらせ、しかも、後者の身ぶりはギリシャからトルコまで広範に分布しているもので、二千年前のギリシャによるイタリア殖民の時代の身ぶりが残っていると考察している。

一方、マクルーハン（マクルーハン 1986:34）は身体そのもののコミュニケーションや身体の記号論的な視点ではなく、異なった文化における生活世界の身体性が、言語コミュニケーションや非言語コミュニケーションに影響を与えているとしている。このように、文化人類学的な視点での研究は、先のダーウィンの生得性といった進化論的なアプローチを否定した文化的決定論に立脚した認識に基づいている。しかしながら、記号論的な視点にしる、文化人類学的な視点にしる、多様な身体動作の「分類」が示されているに留まり、つまり、それぞれの研究を「客観的な基準」に基づいて、さまざまな身体動作を分割しているだけのことである。真に本質的な身体のコミュニケーションは、身体のメッセージの発信者が受信者に格別の注意をしてメッセージをした際に、受信者がどんな反応をするのか、あるいは、全く反応しないのかという身体を介した関わり合いに目を向けることにあると考える。次節でその研究を粗描する。

（4）相互行為としての視点の研究

アダム・ケンドンは、非言語コミュニケーションの多様な領域の開拓者として位置づけられる（Kendon 1982:449-451）。ケンドンは従来の比較行動学的な相互行為の研究を、自らの構造的アプローチによる「サイバネティック・モデル」と対比させている（Kendon 1986:7-8）。従来の比較行動学的なモデルは、（1）相互行為を個々に分離した行為の連続とみなし、おのおののステップをその直前に先行するステップの単純な帰結としてとり扱う（2）相互行為を単一のレベルで分析する（3）その出会いによってなにが達成されたかを問題にする、としている。一方、ケンドンの「サイバネティック・モデル」は、（1）参加者を個々に見るのではなく、参加者間の行動的關係それ自体に注目し、フィードバックの過程を重視する（2）相互構造を多重的な層構造としてみる（3）出会いの帰結ではなく、進行中のプロセスそのものに注意をばらう、としている。人と人との身体的なまじわりを要素の連鎖に還元して理解しようとする機械的な思考様式にケンドンはラディカルな批判をしているのである。しかしながら、ケンドンは批判

するに留まり、プログラムどおりに動く機械としての身体を超えた具体性をそこから見出すことはできない。一方、エリクソン(Erickson 1982:158)は、ある動作が「歴史的時間」に規定されているということは、それが他のどこでもなく会話の文脈が変化するまさにその瞬間に身体の姿勢と身体の空間的距離が変化するとして、文脈としての身体性を指摘した。これ以降、人と人との対面による相互行為を準拠枠として「文脈」のなかから身体のコミュニケーションを読み取っていく研究の動向が始まるようになった(菅原 1993:54)。言語と身体運動とを相互に参照することによりはじめて、人と人との相互間に何が起きているのかがわかるという認識に立ったわけであるが、菅原は、フェルナンド・ポヤトスの主張として、言語・パラ言語(声の高さ、強さ、音質、速さなど)・身体運動の複合体を基本三構造とすると、言語・非言語といった二元論と同じ罫におちいるとしている。つまり、中心としての言語と、その言語の副次的な身体という関係性をめぐいきれないと解釈できるが、菅原は、コミュニケーションとして、副次的な身体ではない、「身体それ自体が明確な固有性をもつ」ことを明らかにする研究が現在望まれていることを指摘している(菅原 1996:21)。また、野村は、

人間の身体は、たんなる記号ではないのである。むしろ、身体性の意義は、すべてを記号化しようとする人間の文化のあらがいがたい作用をすり抜けて、記号であると同時に、記号以前でも以後でもあるというところにある。(野村 1983:231)

としているが、これは意味するものとしての身体の手前に他者と外界に向かって開かれ、相互に疎通しあう「前=交通」(メルロ・ポンティ 1966:137)と符合する。つまり、これからの身体のコミュニケーション研究は、言語と結びついた副次的な身体を微分していくことにあるのではなく、身体そのものが意味するものを、身体そのものの曖昧さをそこなわずに肉感として理解することにあると考える。次節では、コミュニケーションとしての身体を、機械的に整理して考えるのではなく、重層性を認めながら研究している近年の研究動向を取り上げる。

(5) コミュニケーションとしての身体の重層性に視点をのこした研究

ピアジェは、外部に向かう適応的な運動活動のみをとらえ、その身体への内化によって発達を考えた。自己から外へ向かう活動だけを考へて、それが内化されていくことが発達の高次化だとみなして(加藤 1988:34)。それに対して、ワロンは、外部を形作る働きと自分自身を形作る働きという相反するベクトルが、同時に拮抗しつつ働くとしている(加藤 1988:34)。今日、ワロン流の認識を支持する研究が出てきているが、やまだは、自らの子どもの観察から「静観的認識行動」を導き出し、実証している(やまだ 1983:239-259)。子どもがはじめて出会うもの(客体・実存)を指さす時、「立ち止まること」「見つめること」といった身体の動きの停止があるとしているが、この身体の動きの停止は、指を媒体(意味するもの)として何か別のもの(意

味されるもの)を示すため、記号化の開始をあらわし、他者や事物と一体化して生きてきた乳児が媒体項をはさんで「乳児 媒体 他者」という三項関係の世界に入るとしている。そして、「立ち止まること」「見つめること」は、一旦そこから身を引き離し、距離化を保ち、他者の注視するものに惹きこまれていく注意の共同化の一環としてとらえている。指さしを含む身体の動作の現象は、これまで前言語的コミュニケーションの文脈として解釈されてきたが、パロン(Baron 1995:41)も同様に他者の視線の推測から子どもがどのように他者の意図を推測できるのかといった研究を行っている。やまちはさらに、子どもが他者の声の響きから自分の声に惹きこむ際に、「すぐにうたわなない身体」があるとしている。それは、遅延模倣の働きとして、自身の身体から外側にある他者へ向かうベクトルと、Uターンして自身の身体に回帰する両方のベクトルがあり、この内側へ回帰するエンボディの過程において、外側を变形するのではなく、自分自身をつくりかえていくとしている。また、模倣や身ぶりの発生の根源は「人間存在の響存性」(やまだ 2000:62)としている。身体がすぐに反響するのではなく「まち」や「間」や「ねかせる」ことを行なうことは、指さしの静観的認識行動では、空間的な距離化であろうし、遅延模倣では、時間の距離化としてとらえることができる。やまちは、対象を乳児にしているが、同じ「間」を問題としているのが、生田久美子(生田 2000:45 - 65)であるが生田は、熟達としての間を問題としているため、生田の「間」については、認知科学的な視点としての粗描を計画している次のレビュー研究であつかう。

つぎに、研究領域としては先の人類学的な視点での研究に入るが、記号論を拠り所とした平面的な文化研究と明らかに認識の違う身体のコミュニケーションをあつかう研究として、今村のアフリカ南部のボツワナ共和国に住むセントラル・カラハリ・ブッシュマンの狩猟採集生活をフィールドワークした研究がある(今村 1993:1-25)。今村は、ブッシュマンの女性たちが根茎、豆、木の実、野草などの食物を採集に行く際のそれぞれの採集の行動パターンやそれぞれの距離のとり方、採集の時間的な経過を刻銘に調査している。また、採集という「まじめな」仕事の合間に行なわれる副次的な歌やシラミ取りの行動と、「まじめな」仕事を行なう緊張した身体との関係性を明らかにしている。まず、斧で枝を切る、木を揃える、木を担いで移動するといった共同作業においては、作業をしている人の数倍の人が周囲で眺めていて頻繁に交替を行なうのだが、そこには過剰に複雑に交代することによる共同作業の「身体の同調」があるとしている。また、採集活動では、定住地から二キロ程は一列縦隊で歩くが、採集するものが現われてくると徐々に分散し、各人の距離は数百メートルになる。しかしながら、それぞれの採集動作やパターンは、ほぼ同じであり、例えば、誰か一人が速く動き、多くの採集物を採るといったことはない。今村は、「ブッシュマンがあたかも一人の人間が作業しているかのごとく息のあった共同作業を展開するのは、かれらが主体的な行為者として他者と関わり、応答的に、あるいは同型的に同調しているからだ」(今村 1993:25)としている。市川は、他者との関係において起こる一種の感応ないし共振を「同調」(市川 1984:218)と呼び、起こり方の形式面から同型的同調と応答的同調を分け、特にスポーツや音楽、手術などでは相手の動作に同型的にも応答的にも同調しているとしているが、ブッシュマンの採集活動にもこ

の2つの同調がみられる。今村はさらに、採集という「まじめな」仕事による緊張や血縁関係のない女たちの間に生じやすい社会的緊張が、副次的な歌やシラミ取りの行動によって解消されているとし、気分転換や緊張からの逃避などの個人的な行為においてさえ、他者の身体を必要としてたちまち同調しあうという相互行為を行なうとしている。また、このような身体感覚を磨くため、子ども達の遊びに着目し、五感だけでなく身体をコントロールする方法についても克明に観察している。

同調については、斉藤も、日常の身体性をとらえて「並んで歩く技術」(斉藤 1995:109 - 136)を検討している。歩くということは、本論文の次項の身体の技法でモースを取り上げるが、斉藤は、モースの身体技法にはない視点である並んで歩くという身体のコミュニケーションに着目している。斉藤の研究は、新宿、京都の河原町でのカップルの並んで歩くそれぞれの身体の位置について、今和次郎の考現学を方法論として使っていることが特徴である²⁾。その観察では、7つのパターンを整理し、それぞれのパターンにおける属性や季節による変化を克明に記録して考察を行なっている。そして、並んで歩くという身体の位置関係は、身体のコミュニケーションの上で一種の独自性や意味をもち、近代のヨーロッパ文明に起源を持つ身体が存在するときの基本フレームワークであると結論づけている。

身体の空間に関する研究は、現代の情報テクノロジーの進歩による身体性を意識する上で重要な視点となる。マーシャル・マクルーハンは、

西欧の子供たちは人生の早い時期から積み木を積み、錠に鍵をさしこんだり、蛇口をひねったりできるように教育される。つまり、幼児期の教育課程で様々な事項や事件が織りなす複雑な機構に接するために、いきおい時間的關係や空間的關係、さらには機械的な因果關係という視点からものを考えなければならなくなる。それに比べ、アフリカの子供たちはもっぱら話しことばに頼る教育をうけているのであり、こうした教育は西欧の教育と比較するとき高度な劇的な緊張や感情をはらむのだ(マクルーハン 1986:34)

として、時間や空間の均質化した社会で生きる西欧の子供たちとそうでない子供たちの感覚の働き方の違いを指摘している。さらに、その射程には、たとえば車を運転するときの身体が車の大きさまで膨張することや、コンピュータゲームにおいて、飛んでくる戦闘機をよけるために身を反応させる身体、あるいはインターネットメールでやり取りする相手に越境する身体といった現象学的な身体としての拡張する身体が考えられる。このような認識に立った研究として、木村のザイル共和国のバントゥー系農耕民の共存感覚に関する研究をあげることができる。木村は、この農耕民の観察とインフォーマントへのインタビューから、空間的な共存感覚を明らかにしている。この民族は、壁を挟んだ20メートルまでを「一緒にいる」という身体感覚でとらえており、また、150mから200mの距離までを挨拶境界としている。さらに、50m離れた人同士が「会話」を行うことから、この会話が広い身体空間を作り出しているとして

いる。そして木村は、共にあることやつながることに関わるテクノロジーが急速に発展しようとしている過程で、その代価を払わなければいけない日がくることを、この農耕民の調査から教えられたとしている。安西祐一郎も、木村同様、身体と社会との重層性を次のように表現している。

身体論では、われわれがもっている外界とのインタラクションすべてに関する漠然としたイメージを「身体」といっているだけで、実存は存在していない。外界に影響されたり、影響したりする全体を「身体」と呼んでいるのではないか（安西 1992:185）

小馬徹は、ケニアのキプシギス人の挨拶行動に見られる握手に調和や「内/外」「自/他」の概念的対立を融解・解体させる機能を持っているとしている（小馬 1989:132 - 133）。また、表情を持つ手を詳細に描き、日本文化における握手や触覚的感覚の抑圧性についても批判的に述べているが、われわれの身体はどこまでが主体としての身体なのか、身体は溶解しているのかということが問われている。

本章は身体のコミュニケーションの研究を粗描してきた。生得性が文化決定論か、あるいはそれに連動した記号論的に身体のコミュニケーションを取り扱う研究と比較人類学的な研究、そしてその枠にとらわれることのない身体のコミュニケーションを重層的に見る昨今の研究に大別できるが、特に昨今の重層的な研究は、実証主義的な視点や実験室での認知心理学的な視点ではない、日常の子どものにげない行動や街を歩く人々、アフリカの先住民の身体性といった牧歌的な対象や研究方法に照射しながら、現代社会に生きる人々の身体性をラディカルに追求しているといえる。

3. 身体の技法についての研究

前章では、身体の原初的な交換能力から、社会・文化的なコンテクストの中で身体が帯びるコミュニケーションに関する先行研究を素描した。本章では、文化的に形成された身体の根源的な技術やしかけを人間の感覚的な様相としてとらえ、身体の技法として断面的にとらえた先行研究を素描する。文化的に形成された身体をとらえる研究は、道具と身体との関係性、身体と道具の境界に関する研究がまず最初に行われてきている。具体的には、人間一人ひとりが長い年月をかけて習熟し、それぞれのアイデンティティの一部とした暗黙の「わざ」を、明示化して身体から切り離し、非個人化して機械の原理に組み込んでいくその関係性をとらえる研究といえる。かつて、身体の「わざ」の熟練が個人をつくりあげ、身体はその人の経験を物語っていたが、機械においてはその使い方の習得自体もマニュアル化（＝非個人化）され、人間からも社会からも離れた自律性をもつ機械がそれを使う人間そのものも合理的な身体に変えようとしている。これらの研究は、機械の一部となった現代の身体性に対する問題提起としての研究といえる。

次に、文化的に形成された身体の根源的な技術やしかけを人間の感覚的な様相としてとらえた、18 世紀ドイツの教育運動家における体育思想にある「感覚訓練」に関する研究があげられる。グーツムーツを中心とした体育における感覚訓練に関する研究は、現代において再考されるべき論考であるし、本研究の最終目的に最も近接した研究といえる。

また、近年は、国内での研究が増え始め、文化人類学の視座から文化の身体性についての論文や、日常動作における身体の姿勢や構えに関する研究が出てきている。社会・文化的なコンテキストの中で、われわれが自明としている現代の身体性を、武術や舞踊の視点、ヨーロッパにおける坐の姿勢の変容といった、日常性の視座を変化させたところから、日常性の身体を読み解いた研究である。

(1) 身体の道具性に関する研究

身体が文化的に形成されてきたことを前提とし、身体の根源的な技術やしかけを身体の技法としてとらえた場合、身体の研究は、身体と道具との関係性、特に手と道具との関係から研究が出発している。アンリ・フォーシオンは道具と手との関係性を「この両者の関係性は周到綿密な相互扶助によって成り立っており、習慣などといった関係で言いつくせるものではないのだ。一たび手が道具にしたがい、素材の中で、あの自己延長の欲求を満たそうとして活動をはじめると、道具とは、じつは手がつくるものにほかならないという関係が、ただちにあらわれる」(フォーシオン 1979:101)として、道具と手との親密な関係性を描いている。道具が手の延長であり、手と分かちがたく結ばれていたこのような時代においては、身体の外にある道具は、手となって身体の一部にとりいれられていた。しかしながら、道具が機械に変わり、機械のシステムに組み入れられるとともに、以前には道具と一体であった手も、そして人間の身体全体も、外部の合理性が支配する機械的な連関の一部に組み入れられてきた。そのことを「テクノロジー」ということばの成立に着目しながら論じているのが、インゴールドである。「テクノロジー」は、いずれも古典ギリシャ語の「テクネ」(わざ、技芸)と「ロゴス」(理性、合理性)の合成語であるが、本来、論理や弁論の技術であったものが、技術の論理へと 17 世紀後半に変わってきたとしている。さらに、高等言語の書字化がたんに言葉の文字による明文化にとどまらず、言語活動そのものを変えるように、機械化によるわざの「技術」としての明示化は、わざそのものを変えてしまおうとしている(Ingold 1997:106 138)。今日の身体論の底流にあるのは、このような人間的行為の変質と喪失感、被支配感といった人間の活動の身体的文脈といえる。

一方、文化的に形成されてきた身体を次元的に整理しているのがルロワ・グーランである。グーランは人間の動作を三つに分類している。第一は、生物学上の性質に直接結びついた自動的行動に関わる深層の次元である。第二の次元は、経験と教育によって獲得される動作の連鎖に関わる機械的行動である。これははっきりと意識されぬままになされる行動であるが、自動作用ではなく、動作の連鎖がたまたま中断すると、すぐに第三の次元における言語などの表象

の比較対照が介入してくる。第三の次元は、言語活動が大幅に介入してくる明晰な行動であり、他の次元の活動の途中に生じた中断を補ったり、まったく新しい動作の連鎖を創造したりしている（ゲーラン 1973:217 233）。このようにゲーランは、自動的・機械的・意識的という三つの次元でとらえているが、これらの中で特に文化的に身体が形成されてきたことを考える上で重要なのは、第二の機械的な動作の連鎖に関する次元であろう。それは、日常的な食事や歩行といった慣習的な行動や職業的動作、対人関係行動など、社会的な存在としての人間の行動の基盤となるからである。そうした機械的な動作を野村雅一は「しぐさ」として表現し、「機械的動作をしぐさとよぶこととすると、しぐさの多くは人生の初段階に、模倣や、試行錯誤による経験や口頭の伝承などによって習得される」（野村 1999:9）としている。例えば、仕立屋や靴屋などといった職業集団ごとに関に特有の体型やしぐさ、あるいは姿勢であったかを微細に記したラマツィーニの『働く人々の病気』（ラマツィーニ 1980）は、それを示している。

人間が身体を用いるこのような多様な可能性にはじめて注目し、それが社会的に伝承されるひとつの技術であり、「身体技法」として表現したのが、マルセル・モースである。モースは「道具を用いる技法に先立って、ありとあらゆる身体技法がある」（モース 1976:121 156）として、人間のあらゆる身体技法の総目録作りの必要性を喚起した。しかしながら、その後は前章のバードウィステルに代表されるようなコミュニケーション研究に移り、身体の技術的な側面の研究は進展していない。

現代において、再び身体への関心が高まったのは、日本国内を中心としている。山口昌男が文化における身体的パフォーマンスと象徴性の根源的な役割を明らかにする『道化の民俗学』（山口 1993）論文や岩田慶治の東南アジアの少数民族文化の身体性³⁾に関わる論文が身体を現象学的に着目した国内で最も早い論文である。特に岩田は東南アジアのフィールドワークで観察した、とぶ、すわる、まわるといった日常的なしぐさから、文化の深部で生まれる「湯」という独自の考察を行っている。（岩田 1969）また、川田順三は、アフリカの身体技法についての研究成果が多く、代表作として『アフリカのこころとかたち』（川田 1995）がある。さらに多田道太郎は『しぐさの日本文化』（多田 1978）、戸井田道三は『演技』（戸井田 1994）『忘れの構造』（戸井田 1987）といった論考の中で、日本における身体動作の文化的な研究を行っている。戸井田の『忘れの構造』では空間と認識との関係性を取り上げているところが注目される。

近年の代表的な研究は、先のモースの論点を「ハビトゥス」という概念で精緻に定式化したブルデューである。ブルデューは『ディスタンクシオン』（ブルデュー 2000）のなかで、階級社会における身体について生活動作とのかかわりで微細かつ総括的に身体技法をまとめている。また、認知科学の影響下でエスノグラフィを用いて身体技術の研究を行っているのは田辺繁治と福島真人であるが、身体論の展開と言うよりも、認知についてエスノグラフィを用いることの認識論や方法論について詳しいため、今後の課題として残す。

以上、二十世紀におこった文化としての身体に関心の流れは、工業化以前の社会における「伝統的」身体をあつかうもの、つまりテクネ（わざ）という物的・人的環境への適応という視点

での研究と産業化による文化の鑄型からの解放についての研究であり、機械的に対応する社会的機能の面での「一般化」と、意識の面での「個別化」した身体が現代社会における身体性を問う鍵となるようである。

(2) 身体感覚と身体訓練に関する研究

身体技法という随意筋の運動を考えるが、人間の身体の技術性は感覚レベルに及んでいる。それは、方法論的にも随意筋に関する研究で行われている実験室的あるいは実証主義的な認識にたった研究ではなく、現象学的な視座にたった研究であるといえる。先の項における身体が文化的に形成されてきたことを考えると、社会や文化とのかわり方で身体感覚が歴史的に、また今日的にどのように感覚教育として行われてきたかを素描することが必要となる。

エリアスは、十八世紀から十九世紀にかけて、ヨーロッパでは文明化の過程に大きな変化があったとしている（エリアス 1979:10）。そこでは主として生活様式の洗練化が注目されたが、同時にそれは人間生活から身体性を欠落させた過程であるとしている。そして、この身体性を補うようにして、十八世紀のヨーロッパでは「感覚」への関心が高まり、さらに十八世紀後半から十九世紀にかけて近代的な「体育やスポーツ」の成立がうながされた。しかし、身体性に関わるこの両者においては十分な感覚機能の訓練は有効ではなく、近代の体育やスポーツが鍛える人間の「からだ」「からだの力」、あるいは人間のからだの作り変え（改造）を考える体育やスポーツになったとしている。しかしながら、山本徳郎は、グーツムーツの主著『青少年のギムナスティーク』（1793）の中に「我々はシュピールフント（臭覚の鋭敏な獵犬）を仕込むのに費やしている努力を、人間にはしていない」という文章を見出している（山本 1999:65）。山本はヤーンの「トゥルネン」を研究している際にグーツムーツに行き着いているが、グーツムーツの感覚教育とヤーンのトゥルネンの違いを次のように指摘している⁴⁾。

グーツムーツは一般的な人間形成をめざして、身体の教育を教育の全体計画に入れようとしたのに対し、ヤーンの場合は、身体運動を国家市民の形成という目的のための手段としたのである。（山本 1999:67）

として、とくに発生訓練と感覚訓練がグーツムーツからヤーンに受け継がれなかったことが、今日の日本における体育やスポーツに与えた影響の大きさを指摘している。つまり、グーツムーツの感覚教育を粗描することが、今日の身体教育や身体性を考える上で開かれたビジョンを与えてくれるものと考えられる。しかしながら、グーツムーツの『青少年のギムナスティーク』には、成田十次郎（1979）による優れた邦訳があるが、原典が大著なため全訳はなされていない。「感覚の訓練」に該当する十八章も残念ながらその一部が訳されているだけである。そのこと自体が、現代の体育における「感覚」への関心の薄さが示されているともいえる。

梅根はルソーを引用し、少年期の主要な教育として感覚を対象とした身体訓練の重要性を次のように説いている。「私たちは腕や足しか持っていないのか、耳や目も持っているはずではないか。しかもこれらの器官は、腕や足を使うのに必要ではないか。とすれば体力だけを指導してはいけない。体力を指導するすべての感覚を訓練せよ」(梅根 1971:81)。先のグーツムーツはルソーの『エミール』を多く引用していることからルソーの思想から影響されていることがうかがえるが、生活の中で感覚的、肉体的によく訓練された職人と、感覚の鈍い人との比較を行い、「感覚的に訓練されていない人々は、目はあるが見えないし、鼻はあるのに嗅ぐことができない。そして彼らの判断は、月がつかめると思っている乳児のように幼稚だ」(グーツムーツ 1979:325 326)としている。さらに、「我々に鋭く見せたり、すばらしく感じさせたり、匂いがかがせたりするのは、器官そのものではなく、その内部の感覚能力のトレーニングがそれを可能にさせているのである」(グーツムーツ 1979:333)としており、後天的な感覚訓練といったトレーニングが感覚を鋭敏にさせると論じている。

以上、グーツムーツの感覚訓練を中心に粗描してきたが、今日における体育やスポーツが、近代社会における画一的な規格品としての人間づくりに進行してきたことへのテーゼとして読み解くことができるとともに、現代社会において再び感覚教育が身体教育の中で行われる必要性と可能性を探ることができる。

(3) 日常の身体性と文化との関係性についての研究

現代社会に生きる我々の身体は、文化的に形成されてきたことは、これまでの文献を素描することで明らかとなった。本節では、これまでの社会的な文脈に即した身体のありかたを具体的なしぐさや技法へ落とし込んだ現象をとらえた研究を粗描する。

2004年のアテネオリンピックにおいて、水泳競技や柔道で輝かしい成果を出し、また、これまで日本人では先天的に不可能といわれてきた陸上競技の短距離において、今後に期待できる成果を出した。いずれも、これまで欧米から輸入された合理的な身体の加工といったトレーニングに従うだけでなく、日本人の身体にあわせた日本古来の身体技法を見直すことから生まれたトレーニングを導入したことに依拠した結果とする評価がある。河野亮仙は、腰が上がり、左右対象に手と足を動かす歩行を行う合理的な身体動作の西洋人の身体技法に対して、日本人の相撲や武術、あるいは賢所における「結婚の儀」での正中線を保持しながら上下にぶれることなく、腹部に「ため」を作りながら摺り足で歩くとし、これを「摺り足の技法」としている(河野 1999:159 163)。また、西洋人は腰で歩くが、日本人は膝で歩くとしている。さらに武智鉄二は、日本同様、山がちなチベットにすむ人々は、足場の悪いぬかるみや山道を膝頭を機能させながら、短い足で膝でバランスをとりながら、右足を出すと同時に右手を出して、一見遊んでいるように見える歩き方をする人が多いとし、これを「なんば」と呼んでいる(武智 1985:147 151)。また、右足を前に出すとき、左手を出す動きは、明治時代に西洋式の軍隊が組織

され、学校教育でも一律に動く行進をするようになってからであるとしているが、1700年代の浮世絵や写実画から分析している武智の論には説得力があり、特に写実画における農耕民や飛脚の走りやなんばの動きが描かれていることから、なんばは日本人の鋤や鋤を持って田を耕す動作に由来するとしている論考は、職業と深く結びついた日本人の身体性を鋭く指摘している。

一方、武術との関係では、山本義泰が相撲の三段がまえにおける左足と左手が同時に出る動作に着目し、そのルーツを韓国古代のテコンドーにあるとしている（山本 1987:96）。さらに、左手と左足を前に出し、右手と右足を後ろにする構えは、相手が刃物を持っている際、心臓を遠ざける格好であるとしている。武智はなんばの姿を田を耕す動作に還元し、山本は武術の構えに還元しているが、いずれもなんばの身体性は日常の身体を意識する上で必然的にそのようなしぐさに至ったととらえられる。なんばの動きは、舞踊においても見られ、日本舞踊の人形振りや滑稽味を出す際に用いられるが、特に南アジアや東南アジアの舞踊は、武術との関係が強く、ジャワのブンチャット・シアットやタイのクラビー・クラボンといった男踊りの武術では、なんばが基本となっている（河野 1990:125-152）。

最後に坐の身体技法に関する研究を取り上げることができる。菅原和孝は、南アフリカのカラハリ砂漠に住む狩猟採取民グウィを調査するなかで、人間がいかに独特で多様な姿勢をとるかを分析し、「人はサルには決して見られないような独特な手足の置き方、曲げ方をする」（菅原 1994:11-16）として、労働作業における姿勢が影響しているとする。中尾佐助は、インドの庶民の家庭の台所が土間であり、包丁を足で裁くことから、日常の生活姿勢として座る文化が定着したことを指摘しており（中尾 1981:2-6）、また、山折哲雄は、ロダンの「考える人」が本来立って運動する人間が腰を下ろしたのに対し、日本の中宮寺や広隆寺の「半迦思惟像」は床に座っていた人間が上体をあげて腰掛に腰を下ろした姿勢だとしている（山折 1981:8）。さらにハーツフィールドは、椅子に座ることは上位者の安楽を示すことであり、座ることが立つことに優位であることを指摘している（Herzfeld 1985:153-155）。

以上、身体の技法に関する先行研究を粗描してきたが、身体の技法に関しては、おもに日本国内における現象学的な研究が多いことと、原著としての論文ではなく、現象として論じられているものが多い。また、身体の技法としてすべての研究が結ばれていながらも、断片的にしか鳥瞰できない。さらに、比較的近年の研究はほとんど見当たらないことから、身体性を再考することが求められている現代において、本研究を含めた身体と感覚に関する研究が望まれる。

4. おわりに

これまで観てきたように、身体論に関する研究は、大きく身体のコミュニケーションに関する研究と身体技法に関する研究に大別され、さらに、身体のコミュニケーション研究は、生得性か文化決定論かといった論考から始まり、記号論や相互行為論を経て、今日では身体の重層

性に着目した研究が進みつつある。一方の身体技法については、身体と道具との関係性から始まり、身体に還元されていく自身の技法、そして、職業としての身体から日常的な身体の技法へと研究が移ってきた。また、身体感覚教育という論考が過去に行われていたことも見逃すことができない。こうした研究の流れを俯瞰してみると、今後期待される研究は、日常の我々が生活しているなかでの身体性を、現実の実践として、重層性を受け入れながらすすめていく必要がある。また、方法論としても、実証主義的な研究方法ではなく、特に近年の身体論の研究が文化人類学的なフィールドワークとしてエスノグラフィやモノグラフを描くことから明らかのように、生きた日常の実践を現象学的にリアルに描いていくことが求められている。さらに、感覚としての重層的な身体を明らかにしていく上では、身体がなにをどのように認知しているのかに着目し、実践の身体知を感覚的かつ微細にとらえていくことが必要である。以上のことから、今後は、認知をフィールドワークによって明らかにしている先行研究を素描するとともに、身体教育の教育実践者特有の行動様式や知識のあり方と結びついた実践の知を明らかにするため、教育学におけるフィールドワークの可能性を示唆する先行研究を粗描する必要がある。

<注>

- 1) この5分類は、相互に完全に分類されるものではなく、重複した概念の分類であることを指摘している。たとえば、「いやあ」といった頭を掻く身体表現は、適応子であると同時に標識としても分類されるであろう。
- 2) 今和次郎は柳田国男の教えを受け、民俗学の視点から農村の研究を行っているが、渋谷や銀座における「女の歩き方」をスケッチし、身分や階級との関係性を統計として明らかにしている。今の研究については、今和次郎・吉田謙吉編 1986、『考現学採集』学陽書房。にも詳しい。
- 3) 岩田論文の東南アジア研究の中で、北部タイにおける稲作技術をあつかった論文があるが、身体性に近接している。岩田慶治 1963「北部タイにおける稲作技術 タイ・ヤイ族とタイ・ルー族の場合」東南アジア研究, Vol.1 Num.2 pp.22-38. に詳しい。
- 4) なお、ヤーンとグーツムーツの教育内容には違いが見られる。ヤーンにあってグーツムーツになかったものは、鉄棒・平行棒・木馬であり、ヤーンになく、グーツムーツにあったものは、発声練習と感覚教育である。山本徳郎 1972「GutsMuths と Jahn における運動内容のちがいが意味するもの」体育学研究 17(1), 日本体育学会。に詳しい。

<引用文献>

- アイベル・アイベスフェスト、伊谷純一郎・美濃口坦訳 1979、『比較行動学 2』、みすず書房。
- 安西祐一郎 1992、「身体解明と認知科学」『身体の冒険』、UPU。
- アンリ・フォーシオン、杉本秀太郎訳 1979、『形の生命』、岩波書店。
- デモンド・モリス、多田道太郎・奥野卓司訳 1981、『ジェスチャー仕草の西洋文化』、日本ブリタニカ。
- エリアス 1978、『文明化の過程(上・下)』、法政大学出版局。
- グーツムーツ、成田十次郎訳 1979、『青少年の体育』明治図書。
- 平井喜美代 2003、「教師の日常世界」、小島弘道他、『教師の条件』、学文社。
- 生田久美子 2000、『「わざ」から知る』、東京大学出版会。
- 生田孝至 1998、「授業を展開する力」、浅田匡他編、『成長する教師』、金子書房。

- 市村 浩 1984、『身の構造 - 身体論を超えて』、青土社。
- 今村 薫 1993、「サンの協同と分配 - 女性の生業活動の視点から」アフリカ研究 42。
- 岩田慶治 1969、「東南アジア」民俗学研究 Vol.33 Num.3。
- 河野亮仙 1999、「摺り足」、野村雅一、『技術としての身体』、大修館書店。
- 河野亮仙 1990、「舞踊と武術」、野村雅一・鈴木道子編著、『民族音楽叢書 9・身ぶりと言葉』、東京書籍。
- 川田順三 1995、『アフリカの心とかたち』、岩崎美術社。
- 門脇厚司 1992、『子供と若者の<異界>』、東洋館出版。
- 荻谷剛彦 1998、「大衆教育社会と学校のクライシス」、『子ども学』vol.18、ベネッセ教育研究所。
- 荻谷剛彦 2000、『大衆教育社会のゆくえ』中公新書。
- 北村光二 1989、「コミュニケーションの行動学的理解」、糸魚川直祐・日高敏隆編、『応用心理学講座 11 ヒューマン エソロジー』、福村出版。
- 北村光二、「コミュニケーションとはなにか」、季刊人類学、19巻1号。
- 小馬 徹 1989、「両手の拳、社会、宇宙 手の指による数の指示法に組み込まれたクワシヤンのコスプレ」、『国立民俗学博物館研究報告 14巻1号』。
- 今和次郎・吉田謙吉編著 1986、『モデルノロジコ(考現学)』、学陽書房。
- マーシャル・マクルーハン、森常治訳 1986、『グーデンベルグの銀河系』、みすず書房。
- メルロ・ポンティ、滝浦静雄・木田元訳 1966、『眼と精神』、みすず書房。
- モース・M、有地亨・山口俊夫訳 1976、『社会学と人類学』、弘文堂。
- 中尾佐助 1981、「足踏包丁と胸突包丁」、『民博通信 15号』、国立民族学博物館。
- 野村雅一 1999、『技術としての身体』、大修館書店。
- 野村雅一 1983、『しぐさの世界 - 身体表現の民俗学』、日本放送出版協会。
- ピアジェ・ワロン、加藤義信・日下正一・足立自朗訳 1988、「子どもの思考の3つのシステム - 理性的思考と運動的知能との関係についての研究」、『心理科学 11』。
- ピエール・ブルデュー、石井洋二郎訳 2000、『ディスタンクシオン』、藤原書房。
- ラマツツイーニ・B、松藤元訳 1980、『働く人々の病気』、北海道大学出版会。
- ルロワ・ゲーラン、荒木亨訳 1973、『身ぶりと言葉』、新潮社。
- 佐藤学 1994、「教師文化の構造」、『稲垣忠彦・久富善之編、『日本の教師文化』、東京大学出版会。
- 斉藤光 1991、「カップル現象の考現学」、『現代風俗研究会編、『現代風俗 92』、リプロポート。
- 菅原和孝 1993、『身体的人类学 カラハリ狩猟採集民グウィの日常行動』、大修館書店。
- 菅原和孝他著 1996、『コミュニケーションとしての身体』、大修館書店。
- 菅原和孝 1994、「姿勢の自然と文化 アフリカ狩猟採集民の社会から」、『体育の科学』、杏林書院 Vol.1。
- 武智鉄二 1985、『舞踊の芸』、東京書籍。
- 多田道太郎 1978、『しぐさの日本文化』、角川文庫。
- 戸井田道三 1994、『演技』、紀伊国屋書店。
- 戸井田道三 1987、『忘れの構造』、ちくま文庫。

身体知研究の粗描と課題（西原）

- 梅根悟 1971、『ルソー「エミール」入門』、明治図書。
- 鷺田清一 2000、『悲鳴をあげる身体』、PHP新書。
- 山田洋子・中西由里 1983、「乳児の指さしの発達」児童青年精神医学とその近接領域 24。
- やまだようこ 1986、「ふれるということ」愛知淑徳短大紀要 25。
- 山本徳郎 1999、「感覚教育」、野村雅一、『技術としての身体』大修館書店。
- 山本徳郎 1980、「トウモロコシ活動初期における運動場と用具に関する一考察」研究年報 24号、奈良女子大学文学部。
- 山口昌男 1993、『道化の民俗学』、筑摩書房。
- 山本義泰 1987、「韓国古代の手搏について」、天理大学学报 154号。
- 山折哲雄 1981、『「坐」の文化論』、佼成出版社。
- Baron C.S. 1995, “The eye direction detector (EDD) and the shared attention mechanism(SAM): Two case for evolutionary psychology”, Moore C., & Dunham P.J.,(Eds.), *Joint Attention, Its Origins and Role in Development*, Lawrence Erlbaum.
- Birdwhistell R.L. 1970, “Kinesics and Context”, *Essays on Body Motion Communication*, University of Pennsylvania Press.
- Donald A. Schon 1987, “Educating the Reflective Practitioner”, Jossey-Bass.
- Ekman P. 1977, “Biological and cultural contributions to body and facial movement”, Blacking L. (Ed.) , *The Anthropology of the Body*, Academic Press.
- Erickson F. & Shultz J. 1982, “The Counselor as Gatekeeper.”, *Social Interaction in Interview*, Academic Press.
- Sperber D. & Wilson D. 1986, “Relevance: Communication and Cognition”, Basil Blackwell.
- Kendon A. 1982, “The organization of behavior in face-to-face interaction; Observation on the development of methodology”, Scherer & Ekman (Eds.), *Handbook of Methods in Nonverbal Behavior Research*, Cambridge University Press.
- Kendon, A. 1986, “Some reasons for studying gesture”, *Semiotica* 62(1/2).
- Key, M.R. 1975, “Paralanguage and Kinesics (Nonverbal Communication)”, The Scarecrow Press.
- Kimura, D. 1991, “Daily activities and social association of the Bongando in central Zaire; African Study Monographs, 13-1”, *The Center for African Area Studies*, Kyoto University.
- Patterson, M.L. 1983, “Nonverbal Behavior: A Functional Perspective”, Springer-Verlag.
- Scherer K.R. & Ekman P. 1982, “Methodological issues in studying nonverbal behavior”, Scherer K.R. & Ekman P.(Eds.), *Handbook of Methods in Nonverbal Behavior Research*, Cambridge University Press.
- Herzfeld M., 1985 “The Poetics of Manhood Contest and Identity in a Cretan Mountain Village”, Princeton University Press.
- Ingold Tim, 1997, “Eight Themes in the Anthropology of Technology”, Harvey, P(Eds.), *Technology as Skilled Practice*, *Social Analysis*, No.41(1).

主指導教員（生田孝至教授）、副指導教員（杉本英夫教授・永山庸男教授）